太陽光発電量　今のところ大学日本一

熊本保健科学大学学長　小野 友道

熊本保健科学大学の校舎一号館は円形の平屋である。その直径１３０㍍を超す円盤状の屋根は上から眺めると巨大なフライパンである。周りには田園風景が広がり、高層ビルはない。私はここを太陽光発電パネルで埋めつくしたいと素人ながら思ったのである。幸い、経済産業省の補助を得て２６７２枚のパネルを並べることができた。４８０キロワットの容量で大学では日本一である。パネル設置半年後の平成22年秋、日本私立大学協会九州支部総会のお世話を本学がさせていただいた。その折、タイミングよく特別講演にシャープの開発本部長、村松哲郎氏にお願いすることができた。「太陽光発電システムの未来」というタイトルでの話に参加者一同には大変感激して頂いた。講演後、村松氏にぜひ本ブックレット「お天道さまには敵わない」に玉稿を賜りたいとお願いした。氏はご多忙にもかかわらず快諾してくださったのである。また畏友熊本大学学長の谷口功氏は、太陽電池については九州の牽引車であり、これも強引にお願いして執筆いただいた。この原稿が揃うのを待っているうちに、東日本大震災が発生し、併せて福島の原発事故が起こってしまった。われわれは今さらながら自然への畏怖の念を強くした。そしてこの太陽光発電の必要性を実感したのである。

われわれヒトは太陽の恩恵なしには生きていけない。植物の光合成、赤外線などによる温熱な

どなどその恩恵は限りない。そして何より寒い冬の日の日向(ひなた)ぼっこなどにヒトはどれだけ幸せを感じることか。それは暖を取るだけではない。なんだか幸せを感じるのである。何物にも替え難い太陽はまさに神様なのである。熊本大学医学部の整形外科専門の水田博志教授には恩恵の一つビタミンDについてお願いした。しかし一方で、ヒトが長生きする時代となり、その分、ヒトは長期間太陽光を浴びることになり、皮膚や目に大きなダメージを受けるようになった。その最大のものが皮膚がんの発生である。その他まだまだ太陽のヒトへの影響ははかり知れないものがある。

さてさて、太陽は神様か、はたまた敵なのか。自然科学的な一面だけで太陽を語っては太陽に失礼というものである。そこのところを本学の岡部由紀子副学長にお願いし、太陽と人の神秘的な関係について論じていただいた。

東日本大震災そして原発事故による多くの犠牲者・被災者の方々のことを考えるたびに、私たちは心の底をかき乱される、そんな思いがしてならない。今こそわれわれヒトは自然のなかの、ほんの一部であることを自覚し生きていかねばならない。そんなことをこのブックレットを編集しながら考えた。太陽との付き合いをどうするか、ぜひご一読いただきたい。